

平成 29 年度 【 学園研究費助成金 < A > 】 研究成果報告書

学部名 看護学部

氏名 杉浦 美佐子

研究期間 平成 29 年度

研究課題名 星が丘地区における災害対策の現状と椋山女学園大学に対するニーズ調査

研究組織

	氏 名	学 部	職 位
研究代表者	杉浦 美佐子	看護学部	教授
研究分担者	又吉 忍	看護学部	講師
研究分担者	谷口 千枝	看護学部	助教
研究分担者	齊藤 由里恵	現代マネジメント学部	准教授

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

災害発生時には地域自治体や消防、自衛隊などからの「公助」と呼ばれる公的支援が行われるが、「すぐに」「すべての地域へ」は届かないリスクがある。特に東日本大震災のような広域災害と呼ばれる大規模な災害の発生時は、公助は届きにくく、地域で助け合う「共助」、自分の身は自分で守る「自助」が重要となる。災害時の即戦力となる 20 歳前後から壮年期までの人材が多く揃う大学や、地域の住民が最も頼りになる力となる。

本研究は、椋山女学園大学周辺の地域住民に対して大災害に対する認識や備えの現状、大災害が起きた際に椋山女学園大学に期待すること等を学生が災害看護学の授業内で調査をし、星が丘地区の災害に対する意識と大学の地域に対する防災時の役割を明らかにする。

2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

看護学部 4 年次後期に行う災害看護学の授業で、地域の災害対策マップ作り演習を行った 1 回目の演習は、星が丘地区に学生がグループで出向き、災害時に危険な建物や役立つアイテムがないか探し、写真を撮るなどした。また、その地区にある駅や商業施設等で各施設の災害対策についてインタビューを行った。災害時を想定して、事前のアポイントメントは行っていない。2 回目の演習は、1 回目の演習の 1 週間後に行った。各グループに模造紙を配付し、各々が調査した地区の災害対策マップの作成を行った。

また、演習の前後で学生に対し無記名自記式の質問紙調査を行った。普段の星が丘地区の地域住民との関わり状況、星が丘地区に対する災害対策の関心度等を調査した。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

災害時を想定したアポイントメントのない訪問で得た情報として、星が丘地区の店舗ではアルバイト店員のみが従事している場合が多く、防災マニュアル等があったとしてもその内容を把握できていない場合が多かった。また、景観を重視した建物の作りにより、大きなガラス窓やガラス張りの吹き抜け等、災害時に危険となる建物構造が多く見られた。このような星が丘地区の災害への脆弱性から、災害時に大学に緊急の避難者が多数押し寄せる可能性も考えられた。

一方で学生の災害に対する認識や現状についての質問紙調査票からは、帰宅困難になる学生が多くなることが予測された。半数を超える学生は、家族と災害時の安否確認の方法について話し合った経験があった。最も多かった具体的な安否確認の方法は「小学校や公民館など地域の避難所に集合する」であり、83%の者が話し合いの経験を持っていた。次に多かった方法は、「ソーシャルネットワークサービス(SNS)で連絡を取り合う」(22%)で、「災害伝言ダイヤルの利用」は14%に留まった。大学で被災した時の帰宅方法について考えたことのある学生は全体の25%のみであった。大学にいる時に南海トラフ地震が起きた場合、どのような方法で大学から自宅に帰るか尋ねたところ、帰宅できそうにないと回答した学生が全体の44%を占め、49%の者が徒歩で帰宅すると回答した。なお、対象学生の普段の帰宅に要する時間は平均で53.5分(SD: 23.6)である一方で、災害時の予測帰宅時間は206.9分(SD: 253.9)であった。帰宅困難者を除いても、32%の者は3時間以上かけて帰宅しなければならない現状であった。このような現状の中で、今後必ず起こると言われている大災害に向けて、大学がどのような対策をとっていくかを具体的に考える必要性が示唆された。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

①災害看護	②地域コミュニティ	③災害対策マップ	④演習
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

谷口千枝、佐藤晶子、奥野友紀、又吉忍、齊藤由里恵、杉浦美佐子. 看護学生に対する地域での災害対策マップ作り演習の教育効果. 災害看護学雑誌. (投稿中)